

美的感覚を磨くデッサンの指導方法について

—デッサンで対象の明暗を発見させる方法—

守 本 智 美

I. はじめに

人は対象を目の前にして出来るだけ写實的に描こうとすると、思うように描けないという一種の苦痛を覚えることはよく経験することである。デッサンの経験を積んだプロは別として、一般的には自分の思うままに対象を描くことは難しい。対象を写實的に描こうとする傾向は小学校の高学年ぐらいから芽生えてくる。この時期は客観的で現実的なものの見方をするようになるからである。小学校の時の図画工作科の学習を基礎的な美術教育の土台として、やがて大学に入学し更に進んだ美術の教育を受ける機会が出てくる場合、大学において美術教育の基礎として学生にデッサンをさせると、学生個人の持ち得ている美的感性や感覚、またデッサンの技能や技術といった能力にはそれまでの習得の度合いなどになり差があるため、指導者は指導方法を工夫しないといけなくなる。学生の美術の授業への満足度を高めていくためにも優れた指導方法が必要となる。

本学では伝統的に教育学科に入学してきた一年生に「図画工作概説」という科目の授業で、自画像の鉛筆デッサンをさせているが、学生個人の描画能力や観察力には当然のことながらかなり差があることが仕上がった作品に表れる。また制作中の様子からも描く対象を把握する能力に差があることが見て取れる。デッサンは美術の基礎となる大事なもので、描く対象となるものをまずよく見る（観察する）ことから始まる。デッサンについては多くの技法書が出ているが、それらに共通して書かれていることとして、大きく言えばデッサンは形、明暗、材質、空間といった要素に分けることが出来る。これらの基本要素はお互いに関連し合っているので厳格に要素分類するのは難しいかもしれないが、対象を観察し、表現するときのデッサンに対する基本的な考え方の手助けにはなると思われる。デッサンを制していれば、その後各自が色んな描画材料や描く対象を扱うにしても、戸惑いを最小限に抑え表現の世界にスムーズに移行出来やすくなると考えられる。

造形表現の基礎能力であるデッサンの最近の研究では、デッサン教育とスケッチの基礎教育を受けているデザイン系の学生を対象にしたデッサンスキルとスケッチスキルの関係を分析し、両スキルに優れる対象者は透視図法や陰影表現などの基礎的な表現スキルを、デッサンとスケッチに共通するものとして活用していることを明らかにした研究がある^{注1}。また 3DCG やウェブコンテンツなどの分野を学ぶ学生向けに e-ラーニングを活用して、デッサンのトレーニングを行いその使用感を報告したものがある^{注2}。しかしこれらの研究は、デッサン初心者ではなくある程度デッサンが出来る者を対象にした研究であり、またインターネットやコンピュータの活用が十分に出来る環境にあるものを対象にしたものである。実際に実物を前にデッサンを行う状況において、デッサン初心者がどのような方法をとることで、一番手っ取り早く明暗の描写へと近づけるのかということについて、デッサン初心者を対象にアンケート調査を用いた研究はほとんどない。デッサンの初心者は、描く対象のどこが明るくどこが暗いのかと

いうことさえ分かっていないといことがないがしろにされている。

著者は2009年に「自画像の鉛筆デッサンに関する研究—学生へのアンケート調査から見た問題点—」^{注3}の研究を行っているが、本稿はこの第二段として研究したものである。前稿の自画像の鉛筆デッサンの研究においては、顔の目鼻口等の各パーツの配置は出来ても、その後、顔の陰影（明暗）の表現がうまくいかない学生が多いことが明らかになったため、どのようにすれば顔の明暗表現が出来るようになるのかを、鉛筆デッサン授業後の学生へのアンケート調査を中心に検討し、デッサンの初心者への指導法を考察した。

II. 研究方法

1.鉛筆デッサンの方法について

本校の「図画工作概説」という授業で行う自画像の鉛筆デッサンにおいて、顔の陰影（明暗）は立体感を表す表現の一つとして重要だということを著者は学生に伝えている。顔の陰影を見つける方法としては、描く対象の陰影をそのまま見てすぐわかるほどのレベルにある熟練者の場合は簡単であるが、そうでなければ目を細めて対象を見る方法と、赤の下敷きを通して対象を観察する方法が一般的である。このような明暗を見つける方法を、著者は授業時には学生に説明し、実際に赤の下敷きを用意して、学生に顔を鏡で見させたりしながら指導している。そして学生は鏡を見ながら目を細めたり、赤の下敷きを通して自分の顔を見たりしながら、鉛筆デッサンを描いていく。さらに、本作の自画像に取り掛かる前に、別の画用紙に顔の輪郭やパーツをあらかじめ線描しておき、その後ハーフトーン（中間調・半調子）のグレーになるように鉛筆で塗らせて、その画用紙に顔の明るく見える部分を練り消しゴムで抜く作業もさせている。この方法はここでは「グレー下地白抜き法」と名付ける。著者はこのような授業方法を取りつつ、最終的に自画像の本作に取り掛からせ、授業の最後に顔の陰影（明暗）を把握出来たか、見分けられたか、陰影が描けたかどうかを学生にアンケートや感想を書かせて振り返らせている。

2.アンケートについて

(1) アンケートの質問内容について

自画像の鉛筆デッサンが終ったあと、学生にアンケート用紙を配り以下の質問に答えてもらい、また自画像を描いた感想を自由に書いてもらった。アンケートの質問内容は以下の通りであった。

Q1：顔の陰影（明暗）が見分けられましたか。○か×で答えなさい。

Q2：顔の陰影が見分けられた人（Q1で○の人）は、どんな方法によって陰影が一番見分けられましたか。1.そのまま見て、2.目を細めて見て、3.赤の下敷きを通して見て、の中から一つ選びなさい。

Q3:画面全体を中間調のグレーに塗って、あとから練り消しゴムで明るい部分を抜く作業で、顔の明るい部分がよく分かりましたか。○か×で答えなさい。さらに作品に明暗が表現出来ましたか、○か×で答えなさい。

(2) アンケートの日時：2016年6月14・20日の2日間

(3) アンケートの対象者（被験者）：本学の教育学科一年生 171名

Ⅲ. 研究結果と考察

1. アンケート調査結果について

(1) Q1 の調査結果と考察

○印、すなわち顔の陰影（明暗）が見分けられたという被験者は 145 人（被験者全体の 84.80%）であった。×印、すなわち顔の陰影が見分けられなかったという被験者は 26 人（15.20%）であった。被験者全体の約 85%が顔の陰影が見分けられたが、残り約 15%の被験者は顔の陰影が見分けられなかったということが明らかとなった。

(2) Q2 の調査結果と考察

Q1 で顔の陰影が見分けられた被験者（145 人）のうち、1.そのまま見て陰影が見分けられた被験者は 38 人（26.21%）、2.目を細めて見て陰影が見分けられた被験者は 38 人（26.21%）、3.赤の下敷きを通して見て陰影が見分けられた被験者は 69 人（47.58%）であった。顔の陰影は、鏡でそのまま見たり、目を細めて見る方法では両者とも同程度に陰影が見分けられるが、それよりも赤の下敷きを通して陰影を見分ける方法の方がデッサンの初心者には効果的であることが明らかになった。赤の下敷きを通して対象の陰影を見分けるという方法は、要するに対象の固有色の情報を消し、対象を赤一色の明暗に置き換えるということであり、色の情報を隠すことで、対象の明暗を見分けやすくすることである。この方法はデッサンの初心者には対象の明暗を見分ける方法として、対象をそのまま見るとか目を細めるとかいう方法よりも、有効であることが明らかになった。

(3) Q3 の調査結果と考察

「グレー下地白抜き法」、つまり画面全体を中間調のグレーに塗って、あとから練り消しゴムで明るい部分を抜く作業で、顔の明るい部分がよく分かりましたかという質問に対して、○印：明るい部分が分かって、○印：作品に明暗が表現出来たという被験者は 69 人（40.35%）であった。○印：明るい部分が分かったけれども、×印：表現が出来なかったという被験者は 72 人（42.11%）であった。×印：明るい部分が分からなかったけれども、○印：作品に明暗が表現出来たという被験者は 7 人（4.09%）であった。×印：明るい部分が分からなかったし、×印：表現が出来なかったという被験者は 23 人（13.45%）であった。

Q3 で○○と○×：中間調のグレーの下地から明るい部分を抜くという作業によって、明暗が分かったと回答した被験者は合計 141 人（82.46%）であったことから、全体の約 8 割の被験者が、グレーの下地による明暗の発見方法、「グレー下地白抜き法」が有効であったと推察された。結局、白い下地に黒い影つまり明るい中に暗いところを描く（明→暗）よりは、黒い下地に明るい光つまり暗い中に明るいところを描く（暗→明）方法（練り消しゴムで抜くという方法、「グレー下地白抜き法」）を取ることで、明暗がはっきり意識出来るようになったと考えられた。暗い中に明るいところを見出す、つまりネガからポジへ変換するかのような視覚転換が起こることで、デッサンの初心者は明暗を発見し明暗がつかみやすくなったと推察された。デッサンの初心者においては描く対象の明暗に気付かせ、明暗が分かったという感覚を得させるためには、最初にハーフトーンの下地を用意してデッサンの練習をさせること、「グレー下地白抜き法」が大切であり、かつ有効であるということが明らかとなった。

Q3 で×○：被験者本人が明暗は分からなかったが明暗の表現が出来たと回答した被験者の作品を著者は見たが、明暗を把握出来て表現が出来ているとは到底言えない作品の出来であった。また Q3 で××：被験者本人が明暗も分からず明暗の表現も出来なかったと回答した被験者の作品も著者は見たが、やはり明暗は把握出来ていなかったし明暗の表現も出来ていなかった。Q3 の×○と××の被験者は 30 人 (17.54%) であって、デッサンの初心者のうち約 2 割の人は、「グレー下地白抜き法」：グレーの中間調の下地から明るいところを抜くことで明暗に対する感性(感度)を高めていく指導方法を行っても、やはり明暗を見極めることが出来ないと推察された。

3. 明暗の表現の指導方法について

Q1 から Q3 までのアンケート結果により、赤の下敷きを通して対象の陰影を見分けるという方法と、グレーの下地による明暗の発見方法つまり「グレー下地白抜き法」が、顔の明暗を見分ける方法の一つとしてデッサンの初心者の 8 割程度には有効であるということが今回の研究で明らかになった。しかしやはり初心者の 2 割程度はどちらの方法を取っても顔(対象)の明暗が見分けられず、今後は他に何か有効な方法がないのかさらに研究する必要があると考えられる。また、対象の明暗は分かっている、それを紙の上に表現するだけの技術もさらに指導していく必要がある。

「グレー下地白抜き法」は半調子の中にある明暗を、中でも明るい所を見極める方法である。本研究では画面の中でも明るい所を練り消しゴムで抜いていったが、画面全体を灰色(グレー)に塗り画面を仕上げる、つまり半調子の中にある明暗を見極めつつ明るい所も暗い所も描いていく方法は、レオナルド・ダ・ヴィンチが絵画を仕上げる時にとっていた方法である。そしてそのような方法で絵を仕上げることについてはレオナルドが「絵画論」の中でも述べており、彼の絵画が中間調のデリケートさに着目していたことを物語っている。レオナルドの画面全体を半調子に塗る方法は、のちのフランスのアカデミーでも重視された^{注4}。

美的感覚を磨くことの第一歩として、対象を注意深く観察し、対象の違いに気付くこと、すなわち発見するということがまず大事である。デッサンの指導方法の研究をさらに深めることで、美的感覚がさらに研ぎ澄まされる方法により近づいていけると思われる。

IV. まとめ

本研究はデッサン初心者がどのような方法をとれば顔の明暗表現が出来るようになるのか、その指導法を探るために、鉛筆デッサン授業後の学生へのアンケート調査を中心にまとめ考察した。アンケート調査の方法は自画像の鉛筆デッサンが終ったあと、学生にアンケート用紙を配り、Q1:顔の陰影(明暗)が見分けられたか、Q2:顔の陰影が見分けられた人は、どんな方法によって陰影が一番見分けられたか、1.そのまま見て、2.目を細めて見て、3.赤の下敷きを通して見ての 3 つの選択肢の中から一つ選ばせた。そして、Q3:画面全体を中間調のグレーに塗って、あとから練り消しゴムで明るい部分を抜く作業(「グレー下地白抜き法」)で、顔の明るい部分がよく分かったか、○か×で答えさせ、さらに作品に明暗が表現出来たか、○か×で答えさせた。アンケートは 2016 年 6 月に、本学の教育学科の一年生 171 名を対象に行った。その結果、Q1 で顔の陰影(明暗)が見分けられたという被験者は 145 人(被験者全体

の 84.80%) で、陰影が見分けられなかったという被験者は 26 人 (15.20%) であった。被験者全体の約 85% が顔の陰影が見分けられたが、残り約 15% の被験者は顔の陰影が見分けられなかった。Q2 では、1.そのまま見て陰影が見分けられた被験者は 38 人 (26.21%)、2.目を細めて見て陰影が見分けられた被験者は 38 人 (26.21%)、3.赤の下敷きを通して見て陰影が見分けられた被験者は 69 人 (47.58%) であった。顔の陰影は、赤の下敷きを通して陰影を見分ける方法の方がデッサンの初心者には効果的であることが明らかになった。Q3 の「グレー下地白抜き法」によって、明暗が分かっていると回答した被験者は 141 人 (82.46%) であり、全体の約 8 割の被験者にこの方法が有効であった。「グレー下地白抜き法」を取ることで、明暗がはっきり意識出来るようになり、明暗が分かったという感覚を得させるためには、「グレー下地白抜き法」が大事であることが明らかとなった。しかし Q3 の「グレー下地白抜き法」で明暗がわからなかったと回答した被験者は 30 人 (17.54%) で、デッサンの初心者のうち約 2 割の人は、「グレー下地白抜き法」を行っても、明暗を見極めることが出来ないと推察された。本研究により、赤の下敷きを通して対象の陰影を見分けるという方法と、「グレー下地白抜き法」が、顔の明暗を見分ける方法の一つとしてデッサンの初心者の 8 割程度には有効であることが明らかになった。しかしやはり初心者の約 2 割はどちらの方法を取っても顔 (対象) の明暗が見分けられないため、今後はそのような初心者他に何か有効な方法がないのかさらに研究する必要がある。美的感覚を磨くことの第一歩として、対象を注意深く観察し、対象の違いに気付くことで、美的感覚がさらに研ぎ澄まされると思われる。

注釈

注 1. 伊豆祐一、佐藤浩一郎、加藤健郎、松岡由幸「デザイン教育におけるデッサンスキルとスケッチスキルの関係」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』、2016 年参照。

注 2. 西井美甫、佐藤紀子「デッサンプロジェクト ―かたちと陰影を捉えるためのツール開発の試み―」『図学研究』日本図学会、2005 年 pp.87-92 参照。

注 3. 守本智美「自画像の鉛筆デッサンに関する研究 ―学生へのアンケート調査から見た問題点―」『神戸女子大学文学部紀要』、(第 42 巻)、神戸女子大学文学部、2009 年、pp.65-75 参照。

注 4. 伊藤 廉「デッサンのすすめ」1985 年、pp.17-51 参照。